〈私の研究〉

山本宣治（山宣）と進化論

小田切明徳

私は中学校で理科（生物学）を担当しています。数年前、マスコミ紙上で性教育がかなり論議されました。私の属する研究会で、「子どもの発達と性教育」を検討しましたが、そのとき、故徳田御稔氏（進化学者）から、同志社では山宣さんの先駆的実践があるから、それを調べてみたらどうかとテーマをいただきました。

学生時代に古本屋で、『無産者生物学』（全集七巻）を手に入れましたが、本格的な山宣の文献よみはこのときからです。同志社の学園紛争により、人文研で整理した山宣資料は、宇治の「花やしき」に戻された後でしたから、故山本英治氏（山宣長男）の許可をうけ、資料をみせていただきましたが、山宣の性教育にはすぐに接近できませんでした。

そこで、山宣の思想形成期と進化論とのかかわりをテーマに、「山宣と進化論(1)」（『山宣研究』創刊号）をまとめました。

＊　＊　＊

私と進化論との出会いは、故清水三雄教授（相対成長の研究者）の指導により、*Origin of Species* の輪読会（大学一年のとき）が行われたときです。私の属した研究室ではネズミを中心に研究テーマを与えられましたが、私は「進化論と教育」に関心をもちました。

ルイセンコ論争が活発に展開されていたときでもあり、ソ連の理科教育、総合技術教育の研究者の平沢進教授の指導を受け、ソ連の生物学教育の変遷を調べました。

理科教育の現代化が叫ばれ、アメリカの生物学教科書BSCS（日本適用版）、ナフィールド生物（イギリス）が出版されていましたが、ソ連のものは、そのカリキュラムも紹介されていなかったことにもよります。

研究室時代に、ソ連の生物学教育の変遷のまとめと、進化論を扱っている『一般生物学 Общая Биология』を訳しました。このころ、徳田先生の指導を受けて、「ソビエトの生物学教育の変遷――ダーウィニズムを中心として」（たたら書房『科学と生物教育』に収録）をまとめました。

＊　＊　＊

日本では、進化論の紹介が、欧米のようにキリスト教との衝突がほとんどなされずに行われました。明治期におけるこの事情はどのようなものであったのか（人文研第一研究「六合雑誌」研究会で勉強中）、その後の大正・昭和期にどう受け継がれたのかに関心をもっています。

大正九年（海老名総長時代）、予科講師山本は、「人生生物学」と題する自然科学概論（日本における本格的性教育の最初のものとして有名）を担当しています。いま私は、このときの山本の進化論の扱いに的をしぼって、山本が学生に提出を求めたレポート（この大半は進化論を扱っている。大正十三年の受講生であった上野直蔵総長のものも現存。）を調べています。

その三は、山宣の「無産者生物学」と題した庶民への進化論の普及の内容の検討です。

日本の生物学教育の中で、進化論がどのように扱われてきたのか――私たちの教育現場の教師としての今日的課題の一つ――を探るうえで、山本宣治と進化論のテーマで、明治から昭和初年まで、とくに同志社の関係者とのかかわりで調べたいと考えています。

（中学校教諭・理科）